

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 25 日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23593168

研究課題名(和文)看護学部生に対する分野横断的なエンドオブライフ教育プログラムの構築

研究課題名(英文)Development of end-of-life educational program for undergraduate nursing students

研究代表者

糸島 陽子 (ITOJIMA, YOKO)

滋賀県立大学・人間看護学部・教授

研究者番号：70390086

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：新卒看護師・看護師長のエンドオブライフに対する教育ニーズの全国調査とワシントン大学のエンドオブライフ教育の現状調査より、エンドオブライフ教育プログラム試案を作成した。プログラム試案を実施、調査した結果【エンドオブライフの概要】【症状メカニズムと看護】【全人的苦痛と看護】【家族看護】【自分自身へのケア】【緩和ケア医・緩和ケア認定看護師からの実践報告】【模擬患者・家族とのコミュニケーション演習】【看取りケア演習】【実習で生じた感情を言語化する】【看取りまでの身体的変化】【患者・家族との実践的なコミュニケーション演習】からなる看護学部生に対する分野横断的なエンドオブライフ教育プログラムを開発した。

研究成果の概要(英文)：For the design of the program, we based on the results of two different surveys. First, we made a national-wide survey to head nurses and first-year nurses after graduation on educational needs for such a program. Second, we inquired into a similar program used in the University of Washington (WA, USA).

We proposed the program which constituted of 9 items, under the headings of 1) Summary, 2) Pathophysiology, treatment and nursing, 3) Total pain and total care, 4) Family nursing, 5) Self-care, 6) Case reports by physicians and certified nurses for palliative care, 7) Practice for communication with simulated patients and family members, 8) Care for dead bodies, and 9) Expressing emotions through practices, to which we added two additional parts after interviewing our graduated students. They were, 10) Physical changes of patients in the terminal stage, and 11) Advanced practice for communication with simulated patients and family members in various virtual cases.

研究分野：基礎看護学

キーワード：エンドオブライフ 教育プログラム 看護学部生

1. 研究開始当初の背景

わが国の高齢化率は世界に類をみない速度で増加し、2030年には年間の看取りが160万人にのぼると推定されている。しかし、緩和ケアを受けて亡くなる患者数は全体の1%にも満たず、そのほとんどの患者は一般病棟で死を迎えている。

一方、エンドオブライフケアを実践する看護師は、患者の治療中止や差し控えなどの終末期医療の倫理的問題にかかわることが多い。また、看取り経験のない学生が卒業後にはじめて看取りケアを経験することも少ない。

エンドオブライフケアに関する教育は、各分野でトピックス的に取り扱われていることが多く、医療・心理・倫理・法律等の専門分野の教員が協働でエンドオブライフの講義を担当している大学は極めて少ない。

そこで本研究では、看護学部生に対して、各専門分野の教員が協働して分野横断的なエンドオブライフ教育プログラムを開発しようと考えた。

2. 研究の目的

看護学部生に対して、各専門分野の教員が協働して分野横断的なエンドオブライフ教育プログラムを開発する。

3. 研究の方法

【調査1】エンドオブライフ教育プログラム試案の作成

(1) 新卒看護師・看護師長のエンドオブライフに対する教育ニーズ調査

独立行政法人福祉医療機構データベース（WEB版）から無作為に抽出した40施設の新卒看護師40名と看護師長40名に郵送法による質問調査を実施した。

新卒看護師への調査項目

一般病棟の看護師の終末期がん患者のケアに対する困難感尺度、緩和ケア実践に関する医療者の自己評価尺度、学生時代に学んでおきたかった内容

看護師長への調査項目

緩和ケアに関する医療者の態度尺度、終末期にある人への援助、大学教育への希望

(2) ワシントン大学(医学部)のエンドオブライフ教育の現状調査

TNEELを作成し実践しているワシントン大学で、学部生に対するエンドオブライフ教育の現状を調査した。

【調査2】看護学部生へのエンドオブライフ教育プログラム試案の効果の検証

(1) エンドオブライフケア実習前後の変化の調査

3年次看護学部生のターミナルケア論実習前後に中井らが作成した Frommelt Attitudes Toward Care of Dying Scale Form B

(FATCOD-B-J)と実習前後で自分が変化したと思うこと(自由記述)を調査した。

(2) エンドオブライフケア講義前と実習後の変化の調査

2年次看護学部生の講義前と、3年次ターミナルケア論実習後に、FATCOD-B-Jと死生観尺度の質問紙調査をした。

(3) 卒業生へのインタビュー調査

卒業生へのインタビュー調査は、看取り件数を鑑み、1年目の2月から2年目の6月に延期して、卒業後の看取りの状況、本教育プログラムの活用状況など調査した。

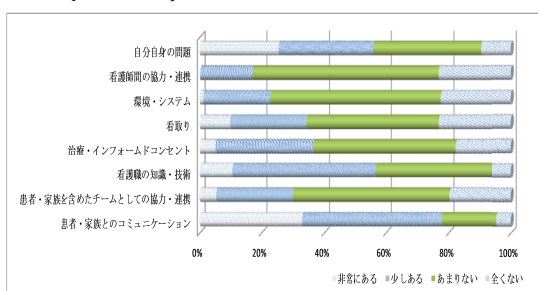
4. 研究成果

【調査1】エンドオブライフ教育プログラム 試案の作成

(1) 新卒看護師 76 名 (19.%) の有効回答があった。

終末期がん患者に対する困難感

新卒看護師は、「患者・家族とのコミュニケーション (32.9%)」、患者が亡くなった後の喪失感が強い、ケアに自信がない、感情のコントロールをすることなどの「自分自身の問題 (25.4%)」に困難感を感じていた。



緩和ケア実践に対する自己評価

新卒看護師の緩和ケア実践に対する自己評価は、がんに関連した身体症状、精神症状に対する知識や技術の自己評価が低かった。

エンドオブライフに対する教育ニーズ

新卒看護師は、「看取りケア」「終末期患者の特徴と寄り添い方」「死の受け入れができていない患者への対応」「症状緩和のための薬剤知識」「家族・遺族ケア」「自分自身へのケア」についての教育ニーズをもっていた。

(2) 看護師長 90 名 (22.5%) からの有効回答があった。

エンドオブライフケアに対する取り組みの現状

看護師長は、新卒看護師の疼痛への対応 (79.6%)、呼吸困難への対応 (64.1%)、患者・家族中心のケア (64.4%) は、たいいてい行っていると評価していた。

大学教育への希望

「死のプロセスと看取りの看護」「専門的知識に基づいた実践的演習」「人への関心と寄り添う姿勢」「コミュニケーション」「専門職としての責任と倫理」「家族・遺族ケア」に対する教育ニーズをもっていた。

(3) ワシントン大学 (医学部) のエンドオブライフ教育の現状

ワシントン大学の慢性期ケア・クラークシップは、老年医学コース、リハビリテーション医学コース、慢性疼痛コース、緩和ケアコースの4コースに分かれ、4週間の実習を行っていた。実習前は、「コミュニケーションに関する講義」「模擬患者との医療面接」を学生全員が体験していた。実習後は、学生が体験した感情を大切にしながら語る場を設け、学生自身の体験の意味づけが行えるよう教員が発問を重ねていた。また、いつでもオンライン上に掲載されているエンドオブライフに関する情報を入手して自己学習できるリソースを準備していた。

上記内容より、本学におけるエンドオブライフ教育プログラム試案を作成した。

講義	<ul style="list-style-type: none"> ・エンドオブライフの概要 ・症状のメカニズムと看護 ・全人的苦痛と看護 ・コミュニケーション ・自分自身へのケア ・実践報告 (緩和ケア医・緩和ケア認定看護師)
演習	<ul style="list-style-type: none"> ・看取りまでの変化 ・看取りケア(エンゼルメイク) ・模擬患者とのコミュニケーション
実習	<ul style="list-style-type: none"> ・受け持ち患者の看護をとおして生じた感情を「こころの健康状態」の記録用紙に記載して、日々の気持ちの変化をみつめる。 ・統合カンファレンスの導入では、実習で生じた感情を表出する場を設ける。

【調査2】看護学部生へのエンドオブライフ教育プログラム試案の効果の検証

(1) エンドオブライフケア実習前後の変化 (2012)

3年次看護学生に45名(有効回答率75%)。ターミナルケア論実習前後のFATCOD-B-Jの得点は、『死にゆく患者へのケアの前向きさ』が 55.9 ± 6.52 点から 65.2 ± 5.3 へ($p=0.001$)、『患者・家族を中心とするケアの認識』が 53.7 ± 3.61 点から 55.9 ± 3.73 へ($p=0.001$)へ実習後の得点が高くなった。受け持ち患者のケアをとおして、死や死に逝く人と関わる怖さが軽減し、患者の思いを知ることの大切さ、苦痛を和らげる方法、家族ケアの重要性を学んでいた。

科目名は、旧カリキュラムではターミナルケア論実習

(2) エンドオブライフケア講義前と実習後の変化 (2013)

2年次講義前と3年次実習後に同意の得られた看護学生に45名(有効回答率75%)。『死にゆく患者へのケアの前向きさ』は 52.8 ± 3.74 点から 55.0 ± 3.83 へ($p=0.001$)、『患者・家族を中心とするケアの認識』は 41.9 ± 5.37 点から 63.7 ± 4.89 へ($p=0.000$)。死生観尺度は、「死からの回避($p=0.006$)」、「解放としての死($p=0.026$)」、「寿命観($p=0.047$)」が講義前と実習後で変化していた。また、講義前は、「死後の世界観」と「死にゆく患者へのケアの前向きさ」に弱い相関をしめしていた $r=0.416$ ($p<0.001$)が、実習後にはFATCODB-J)と死生観には相関はみられなかった。

(3) 卒業生へのインタビュー調査

卒業生5名に聞き取り調査をした結果、卒業後の看取り経験は、1名から5名で、そ

のほとんどがサポートを受けながらで実施していた。また、看取り経験から対象の選定が少なく、プログラムの効果を検証するところまではいかなかったが、卒業生のインタビュー調査から、「看取りまでの身体的変化」と「家族とのコミュニケーション」について、プログラム試案を強化する必要性がみられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

伊藤あゆみ、糸島陽子 他、ルーブリックを活用したエンドオブライフケア実習評価と課題-学生評価と教員評価からの検討-、人間看護学研究、14巻、2016、41-45
糸島陽子、伊藤あゆみ、奥津文子、看護学部生のターミナルケアに対する態度の変化-FATCODB-J)と学部生の主観から-、死の臨床、査読あり、38巻1号、2015、190-195

糸島陽子、奥津文子、荒川千登世、本田加奈子、大門裕子、前川直美、霜田求、カール・ベッカー、人間看護学研究、12巻、2014、25-32

糸島陽子、前川直美、奥津文子、カール・ベッカー、ワシントン大学(医学部)エンドオブライフ教育の現状-慢性期ケア・クラークシップ・カンファレンスに参加して-、人間看護学研究、11巻、2013、71-75

[学会発表](計4件)

糸島陽子、伊藤あゆみ、奥津文子、ターミナルケア論実習でエンゼルケアに参加した看護学生の体験、第35回日本看護科学学会学術集会、2015年12月6日(広島)

伊藤あゆみ、糸島陽子 他、ループリック
を活用したエンドオブライフケア実習評
価と課題 学生評価と教員評価からの検
討-、第 35 回日本看護科学学会学術集会、
2015 年 12 月 6 日 (広島)

Itojima Y., Arakawa C., Ito A., Becker C.:
Changes in Japanese Undergraduate nurses'
views of life and death and attitudes towards
end-of-life care after education, 4th World
Academy of Nursing Science 16, October,
2015, Hannover (Germany)

前川直美、糸島陽子、奥津文子、ターミ
ナルケア論実習の統合カンファレンスに
おける学生の学びの過程、日本看護学教
育学会第 23 回学術集会 2013 年 8 月 8 日
(仙台)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

糸島 陽子 (ITOJIMA Yoko)
滋賀県立大学 人間看護学部 教授
研究者番号 : 70390086

(2) 研究分担者

奥津 文子 (OKUTSU Ayako)
関西看護医療大学 看護学部 教授
研究者番号 : 10314270

ベッカー カール (BECKER Carl)
京都大学こころの未来研究センター教授
研究者番号 : 60243078

荒川 千登世 (ARAKAWA Chitose)
滋賀県立大学 人間看護学部 准教授
研究者番号 : 10212614

本田 加奈子 (HONDA Kanako)
滋賀医科大学 医学部看護学科 准教授
研究者番号 : 60381919

前川 直美 (MAEKAWA Naomi)
京都学園大学保健医療学部看護学科講師
研究者番号 : 20352916

大門 裕子 (DAIMON Hiroko)
滋賀県立大学 人間看護学部 助教
研究者番号 : 90552638

(3) 連携研究者

霜田 求 (SIMODA MOTOMU)
京都女子大学 現代社会学部 教授
研究者番号 : 90243138